

平成26年度授業づくり拠点校（中学校国語）実践事例

1 公開授業の指導案

1年1組 国語科学習指導案

指導者 小田 康弘

1 単元 つながりを読む

教材名 「シカの『落ち穂拾い』—フィールドノートの記録から」
辻 大和

2 単元構成の意図

(1)教材観

本教材は宮城県牡鹿半島の金華山で、ニホンザルが樹上から落とした食物を、ニホンジカが採食する行動「落ち穂拾い」に興味を持った筆者が、その日時・場所・天気や、シカが採食した植物、そのシカの頭数などについて観測し、研究した記録をまとめた文章である。

本文は、小見出しで「観察のきっかけ」「観察からわかったこと」「仮説」「仮説の検証」「考察」の5つのまとまりに分かれており、これらは主に「事実」と「考え」に分類すること（事実・・・「観察のきっかけ」「観察からわかったこと」「仮説の検証」、考え・・・「仮説」「考察」）ができる。観察→仮説設定→検証→考察という文章構成で、理解しやすい教材である。

また、本教材では図表が多く使用されている。筆者自身が研究の過程を説明し、仮説と検証を述べる上で、図表が重要な働きをしていることが理解しやすい教材である。

(2)生徒観

生徒は1学期に「ちょっと立ち止まって」の学習で、段落や、図と文章の関係に着目して、説明の内容や筆者の考えを読み取る活動に取り組んだ。さらに、教科書に掲載されていない図について見えるものと見方を説明する文章を書く活動にも取り組んだ。しかし、図に関心をもち、見えるものや見方を考えることはできるが、それを文章に書くことができない生徒が多かった。

本教材では、図表と本文との対応関係をつかむことから内容を理解するだけでなく、図表の果たす役割についても生徒に考えさせたいと考える。そして、図表からわかる事実を捉え、その事実から自分自身が考えたことを自分の言葉で説明する文章を書いて表現することを期待したい。

(3)指導観

本文中にある図表にはどのような意味があるのか。図表と本文との対応関係を捉えながら文章を読むことを通して、「事実」と筆者の「考え」とを読み分けな

から筆者の論理の展開のしかたをつかませたい。さらに、その図表を提示した筆者の意図やその効果について理解させたい。

そして、図表から読み取った「事実」と、その「事実」についての「考え」を説明する文章を書く活動を通して、「図表から情報を読み取る力」や「事実と考えを書き分ける力」を付けさせ、生徒の表現する力の向上につなげていきたい。

3 指導目標

- (1) 事実と考えを見分け、その関係を捉えることができる。
- (2) 図表と本文の関係をつかみ、図表の役割を捉えることができる。
- (3) 図表などを用いた説明の文章を書くことができる。

4 指導計画（全5時間）

- | | | | |
|-----|------------------------------------|-----|-------------|
| 第一次 | 事実と考えとを見分けながら全文を読む。 | ・・・ | 1時間 |
| 第二次 | 図表と本文との関係をつかみながら読み、まとめりごとの内容を読み取る。 | ・・・ | 3時間 |
| 第三次 | 図表からわかった事実と考えを説明する文章を書く。 | ・・・ | 1時間
(本時) |



5 本時案（板書型指導案）

1 主眼

図表から読み取った事実と自分の考えを説明する文章を書くことができる。

2 指導上の留意点

① 「～する」「～る」動詞をいくつか紹介し、日常生活の中で使われる言葉に目を向けさせ、本時の学習課題について興味をもたせる。

② 各グループで図表を見てわかったこと（事実）を具体的に挙げさせ、ホワイトボードに書かせる。

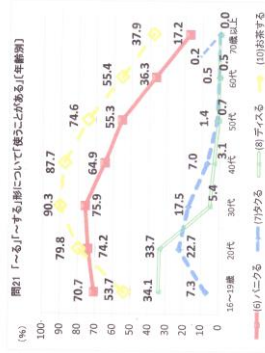
③ 図表の中からわかった情報（事実）を取捨選択させ、必要な情報（事実）を選んで、自分の考えを説明する文章を考えさせる。

④ グループで互いの文章を読み合わせ、友達の意見や文章を参考にして、必要であれば文章を推敲させる。

評価

- ・ 図表からわかったこと（事実）を具体的に挙げている。
- ・ 図表を使って、わかった事実と自分の考えを説明する文章を書いている。

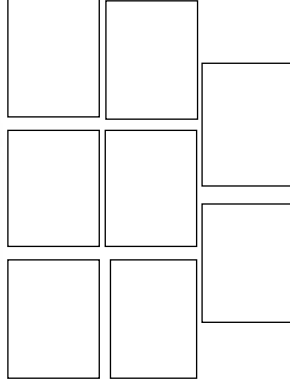
図表からわかった事実と自分の考えを説明する文章を書こう。



「～る」形	「～する」形	「～る」形が使用されている割合	「～する」形が使用されている割合
(1) 推薦する	推薦を言う、よめる意味で	6.8	44.7
(2) 準備する	準備をばらす、準備に備う、よめる意味で	5.7	41.5
(3) 出る	「対象や場を、自分する」という意味で	25.0	52.3
(4) まよどる	「対象や場を準備する」という意味で	48.7	34.9
(5) 半ばる	「まよどる」という意味で	1.0	12.5
(6) 入る	「入って（入る）に入る」という意味で	8.8	41.6
(7) タカる	「タカシに取る」という意味で	71.9	21.6
(8) アイヌる	「アイヌ、アイヌする」という意味で	72.7	20.1
(9) アゲする	「アゲ、アゲする」という意味で	1.2	8.3
(10) ぶさる	「ぶさ、ぶさする」という意味で	5.8	27.6

図表からわかったことを挙げてみよう。

ホワイトボード
(各班の意見)



めあて

図表を使って、事実と自分の考えを書こう。

④ 書いた文章を互いに読み合い、読みやすくなりやすい文章かどうか相互評価させる。

課題二
「～する」「～る」動詞についての図表からわかった事実と自分の考えを説明する文章を書こう。

③ 課題一「図表を見てわかったこと（事実）」から選んで、わかった事実と自分の考えを説明する文章を書かせる。

課題一
二つの図表からわかったことを二つ以上挙げてみよう。

② 二つの図表を見てわかったこと（事実）をグループで挙げさせる。

① 「～する」「～る」形の動詞を紹介する。

本時の流れ

2 研究協議での意見や提案、授業後の考察

(1) 研究協議での意見や提案

① 活用する力を高める工夫について

【成果】

- ・ 身近な言葉の資料・教材でよかった。
- ・ 課題が明確であった。
- ・ 活動が活性化するようにグループ活動やホワイトボードを使うなどの工夫がよかった。

【課題】

- ・ グラフ・表からわかった事実の検証が十分ではなかった。
- ・ 導入段階で、グラフの読み取りが十分にできていなかった。
- ・ だれにむけて説明する文章を書くのか明確でなかった。明確な相手意識が必要である。
- ・ ホワイトボードなどを使ってはいるが効果的ではなかった。
- ・ すぐにグループでの活動になったが、個人で考える時間が必要である。

② 効果的なめあての提示・振り返りについて

【成果】

- ・ めあてが明確であった。
- ・ 「できたこと」「できなかったこと」という振り返りがよかった。
- ・ 言葉で子ども自身も自身が自分の思いを書きことができる工夫がされていた。

【課題】

- ・ 相互評価の観点が不明確でわかりにくい。
- ・ めあてを提示するタイミングが適切ではなかった。

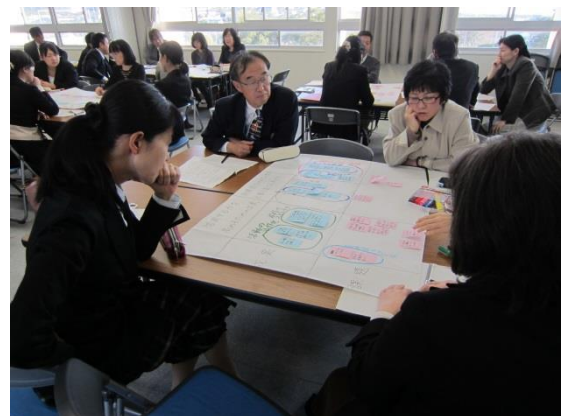
③ その他

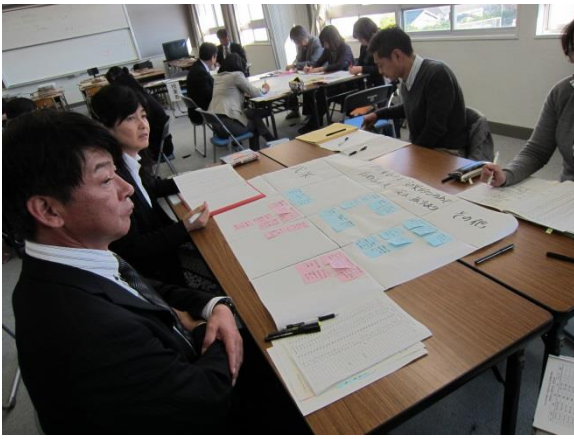
【成果】

- ・ ホワイトボードなどのツールの活用がよかった。

【課題】

- ・ 教室全体で意見を共有する時間と場が少なかった。
- ・ 他のグループの意見がわかるような示し方などの工夫が必要である。
- ・ ワークシートなどには書けない生徒にどのように支援していくか。





(2) 指導助言より

- ・ 図表が効果であった。身近によせる教材であった。教材が身近にならないと活用に結び付かない。
- ・ 学習指導要領の言語活動例を使った授業づくりであった。
- ・ 単元を通じてつけたい力が明確であった。図表を使って書くこと。図表からわかったことを説明する文章が書けることが大切。図表からわかった事実を言葉で説明できるかどうか。授業の前半をいかに取り組ませるかが大切だった。
- ・ 相互評価をするのであればより具体的な項目でさせるべき。
- ・ グループ間で意見を交流させる方法はいろいろある。ホワイトボードだけではない。
- ・ 振り返りが大切。振り返りにも二通りある。一つは積み上げ、付いた知識・技能が理解できたかどうか。もう一つは生徒自身がどんなものによって、どのように変化したかどうか。
- ・ 「活用する力」とは具体的にどのような力なのか。国語でつけたい力は、「実生活で生きて働く国語の力」と「他教科の基本となる国語の力」の二つである。
- ・ 子どもたちが何のために学ぶのか、主体的に学ぶにはどのようにすればよいのか授業者がしっかりと考えなければならない。めあての示し方の工夫が必要である。
- ・ グラフの読み取り方については国語の授業でも取り扱うべきである。
- ・ 事実がきちんと読み取れていないと自分の考えは書けない。図表の読み取りをしっかりとさせるべきである。
- ・ 条件作文では相互評価の観点を明確にすべきである。

(3) 授業後の考察

「活用する力」を向上させるためにはどのような授業づくりをすればよいのか。今回の授業で意識した子どもに付けたい力は、「図表を読み取る力」と「(図表で読み取ったことを活用して)事実と考えを書き分ける力」の二つであった。本学級の生徒は低学力の子が多く、文章で表現することができない、あるいは

表現することに苦手意識をもつ生徒が多い。今回の授業では、生徒が図表から読み取ったことをもとに文章を書く活動を通して、自分の表現する力に自信を持たせたいと考えた。そのため、提示資料をできるだけ身近なものにして生徒の興味・関心をひくとともに、文章構成をできるだけシンプルにして全ての生徒が文章として表現することができるようにと考えた。その結果、日ごろはなかなか表現できない生徒でもなにかしらの文章を書くことができたのはこの授業を実施した成果であった。しかし、自分の考えを書くことができない生徒が多く見られたのも事実である。どうしても書く時間を確保しようとしたため、図表をしっかりと読み取ることができなかった。図表を読み取ることによりしっかりと時間をかけて、分かった事実を文章として表現するだけでもよかったのではないかと考える。

いずれにしても、今回の授業だけで「活用する力」が向上するわけではない。日々の授業の中で、「考えて表現する」ことを常に意識した授業づくりをしていくことの必要性を感じた。

3 授業づくり拠点校実践に取り組んだ成果と今後の課題

(1) 成果

活用する力を高めるための授業改善に取り組むことで自分自身の授業づくりについて次のようなことを考えることができた

- ① 生徒に付けたい力の明確化。
- ② 生徒の学習意欲を喚起する手立ての工夫。
- ③ 生徒が学習内容を明確にできるためのめあての提示の工夫。
- ④ 生徒が考え、表現する機会や場面の設定。
- ⑤ 学習したことを振り返る場面の設定と振り返りの工夫。

(2) 今後の課題

活用する力を高めるために今後、次のような課題があると考えられる。

- ① 全教科での活用力を高めるための授業づくり・授業改善。
- ② 活用する力の育成のための教師間の共通認識・共通理解。
- ③ 全国学力・学習状況調査結果を授業に活かす方法・手立て
- ④ やまぐち学習支援プログラムの効果的な活用。

日々の授業実践の中で、全教科全教員で「活用する力」とは何かを理解し、それを高めるためにどのような手立てや工夫が必要か考えていく必要がある。